法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

<研究ノート>ワークショップにおけるアイスブレイク分類の試み

TAZAWA, Minoru / 田澤, 実

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
15
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
2017-11
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014256

〈研究ノート〉

ワークショップにおけるアイスブレイク分類の試み

法政大学キャリアデザイン学部准教授　田澤　実

1　はじめに

本稿の目的は、ワークショップのアイスブレイクについて分類を試みることである。このような分類を行うことにより、アイスブレイクの全体像を把握しやすくなること、効果的なアイスブレイクを選定しやすくなることが期待できる。

本稿では以下の構成をとる。つづく第2節では、ワークショップとアイスブレイクについて概観する。第3節で本稿における分類の概要を述べ、第4節で大分類の結果を、第5節で小分類の結果を述べる。第6節はまとめである。

2　ワークショップとアイスブレイクの概観

(1) ワークショップとは

学校、企業、地域コミュニティなど様々な場においてワークショップと呼ばれる活動が行われるようになってきている。ワークショップとは、中野（2001）によって「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と定義されている。また、薗田（1994）は、ワークショップには以下の5つの要点があると述べている。

1）ワークショップに先生はいない

ワークショップとは、参加者が自ら主人公となってつくりあげていく。専門家による一方通行の講演ではない。

2）「お客さん」でいることはできない

ワークショップの参加者は受け身の聴衆として、ただ座っているばかりではいられない。自分の知識と体験を他のメンバーに提供することが求められる。

3）初めから決まった答えなどない

ワークショップは「創造の場」である。当初の予想通りに展開するのでは成功したワークショップとはいえない。

4）頭が動き、身体も動く

ワークショップとは議論するばかりではなく、さまざまな体験を身体に注ぎ込むことが重要である。

5）交流と笑いがある

ワークショップは、互いに認め合い信頼しあうメンバーに支えられた騒々しさがある。静かに講師の話に耳を傾ける雰囲気とは縁遠い。

以上より、ワークショップとは参加者に主体性があること、学習者には共に学ぶメンバーがいること、頭だけでなく身体も使うことなどがわかる。

安斎（2013）は、「ワークショップのプログラムには様々なバリエーションが考えられる」と前

置きしたうえで、以下の4段階をワークショップの基本構造としている。

1）導入
ワークショップの概要説明、文脈説明、参加者同士の自己紹介を行い、活動への導入を行う。

2）知る活動
講義や資料の調査などを通して新しい情報を収集し、話し合いを通して知識化する。

3）創る活動
集団または個人で、新しいものを創り出す活動に取り組む。ワークショップにおけるメイン活動である。

4）まとめ
創りだした成果物について発表し、共有する。また、ワークショップの活動を振り返り、経験に意味付けを行い、今後学んだことを応用できる状況はないか考え共有する。

（2）アイスブレイクとは

先述の安斎（2013）による4段階のうち、「導入」の段階で行われるのがアイスブレイクである。今村（2014）は下記のように説明している。

> *見知らぬ者どうしの集団の場に投げ込まれた時、私たちのこころとからだは、「アイス（氷）」のように張りつめて凍てついた状態になっている。その「アイス」の状態を「ブレイクする（打ち破る）」ことがアイスブレイク（ice break）である。「氷を打ち破る」というのが原義だ。つまり、見知らぬ複数の人がいる場所で固い雰囲気を壊すことがアイスブレイクである（p22）。*

また、今村（2009）は、アイスブレイクのひとつひとつの活動を“レッスン”と呼び、それらは、①自己紹介、②他者認知（他者への関心の覚醒）、③共同作業（チームワークの形成）という要素で構成されていると述べている。そして、「アイスブレイクは集団の「固さ」を突き崩すダイナマイトの役割と、人と人をくっつけるセメントのような役割を果たすものなのです（p9）」という例えで表現している。

なお、田中・森部（2014）は、アイスブレイクを効果的にすすめるために、下記のような取り入れるべき点と、避けるべき点があるとしている。

取り入れるべき点
- ➢ 誰でもやさしく回答できるもの
- ➢ 趣味、スポーツ、嗜好など共通に話し合える身近なもの
- ➢ 笑いやユーモアを誘うもの

避けるべき点
- ➢ 相手を批判したり、傷つけたり、劣等感を感じるようなもの
- ➢ 政治や宗教に関するもの
- ➢ 個人の容貌や身体に関するもの

また、青木（2013）は、アイスブレイクで大切なことは、「適切なものを」「参加者のペースに合わせて」「イヤがることを無理強いしない」ことであるとし、以下の5つのようなアイスブレイクにならないように注意する必要があると述べている。

1）ひとりハイテンション
進行役が妙なハイテンションで張り切っているが、参加者がついていけない。

2）聞かれたくないのに・・・・・・
年齢を聞かれたくない参加者がいるのに、年齢順で並ばされる。

3）いきなり身体接触!?
進行役が何の前触れもなく、お互いの身体が接触しあうようなワークを指示する。

4）内輪うけでクスクス

特定の人にしかわからない誰かのことで笑いをとり、一部の人しか楽しめない状況。

5）過剰なアイスブレイク

十分に打ち解けているのに、必要以上に多くのアイスブレイクがあり、逆に疲れる。

3　分類の概要

（1）データ収集法

本稿では、アイスブレイクがどのように分類されているのかについて注目する。そのため、複数のアイスブレイクを紹介している書籍に注目することにした。なお、アイスブレイクという用語が使われていなくても、内容としてはアイスブレイクを示すと考えられるものも含めて検討することにした。具体的には、構成的グループエンカウンターのエクササイズ（特にショートエクササイズ）とチーム・ビルディングについて、所要時間が短いものを紹介していれば含めることにした。

（2）アイスブレイク分類の先行研究

アイスブレイクの分類に関連した先行研究としては、レクリエーションのアイスブレーキングゲーム集を分類した三浦（2002）および、構成的グループエンカウンターのエクササイズの分類をした國分・片野（2001）がある。

三浦（2002）は、自身の書のアイスブレイクの分類について下記のように述べている。

> *素材となるゲームの分類（ジャンル分け）も、いままでにない分類を試みたものです。単に、ゲーム素材を参加者の人数（例えば2人組のゲーム、グループのゲームなど）や隊形などにより分類してきたものではありません。当協会が長年にわたって展開してきた「人と人との交流の尺度」を大まかな段階で示す「導入段階・・・・交流段階・・・・自己表現段階」という分類にもこだわらない、まったく新しい分け方です。それは、リーダーを含めた集団に対して、アイスブレーキングの素材がもつ効能や機能を重視して分類するというものです（p6）。*

また、國分・片野（2001）は、構成的グループエンカウンターのエクササイズについて、6つのねらい（自己理解、自己受容、自己表現・自己主張、感受性、信頼体験、役割遂行）と行動変容の3つのボタン（感情・思考・行動）を関連させて展開することを推奨し、エクササイズを分類する理由について下記のように述べている。

> *なぜ分類するのか。分類することで、エクササイズのねらいがいっそう明確になるからである。同時に「効率的かつ効果的」なエクササイズ選定ができるようになるからである（p124）。*

両者に共通していることは、目的要因に注目していることであろう。

（3）本稿におけるアイスブレイク分類

本稿では、上記の基準で収集した書籍を用いて、アイスブレイクの大分類と小分類を行う。

大分類については、各書籍の章立てに注目する。複数のアイスブレイクを紹介する書籍では、どのようなまとまりをつくって各章を構成しているのか、そのまとまりはどのような順序で並べられているのかに注目する。このような点を明らかにすることは、アイスブレイクの全体像が見えやすくなるメリットがあると考えられる。

小分類については、ひとつひとつのアイスブレイクの紹介は、どのような要素から成り立っているのかに注目する。具体的には、アイスブレイクを紹介するページの見出しに注目する。このような点を明らかにすることは、アイスブレイクの選定の際に、どのような点に注意すべきなのかを理解しやすくなるメリットがあると考えられる。

4　大分類の結果

(1) 大分類のカテゴリー

本稿では、上述までの概観をもとにしてアイスブレイク大分類のカテゴリーとして「人間関係」「隊形」「目的」を設けた。

①人間関係

三浦（2002）が、従来の分類と位置づけた「『人と人との交流の尺度』を大まかな段階で示す『導入段階・・・・交流段階・・・・自己表現段階』という分類」のように、参加者間の人間関係の程度による分類が色濃く出ていると判断できるものを「人間関係」とした。この場合、会の進行が始まったばかりの時点に適したアイスブレイクは前半の章に、会の進行がある程度進んだ時点で適したアイスブレイクは後半の章に位置づく。

②隊形

三浦（2002）が、従来の分類と位置づけた「参加者の人数（例えば2人組のゲーム、グループのゲームなど）や隊形などにより分類してきたもの」のように、参加者達がアイスブレイクをしている時の形による分類が色濃く出ていると判断できるものを「隊形」とした。この場合、二人一組のペアのアイスブレイクは前半の章に、集団全体で行うアイスブレイクは後半の章に位置づく。

③目的

三浦（2002）による「素材が持つ機能を重視」した分類や、國分・片野（2001）による6つのねらい（自己理解、自己受容、自己表現・自己主張、感受性、信頼体験、役割遂行）による分類のように、そのアイスブレイクを導入することによりどのようなことが期待できるのかという点による分類が色濃く出ていると判断できるものを「目的」とした。

(2) 大分類の結果

各書籍においてアイスブレイクが紹介されている章立て（注：書籍によってはPARTなどの表記も使われていたが、本稿では章と統一して呼ぶことにする）および該当する大分類カテゴリー等を表1に示す。

①『アイスブレーク』石田易司著　エルピス社

第2章からから第7章が該当する。しかし、各章のタイトルは書かれておらず、「初めの方に書いてあるものは最初の頃に、後ろの方に書いてあるものは終わりの方に使うのが一般的だろう（p6）」と述べている。そこで、本稿では、「人間関係」による分類と判断した。

②『楽しいアイスブレーキングゲーム集』三浦一朗著　日本レクリエーション協会

第1章から第5章が該当する。これら5つは「素材が持つ大切な機能を中心に分けたもの（p8）」である。そして、第1章から第3章で「個々の交流姿勢が確立（p11）」することで、第4章や第5章は「機能を発揮する（p11）」と述べている。そこで、本稿では、「人間関係」および「目的」による分類と判断した。

③『アイスブレイク入門』今村光章著　解放出版社

第3章から第5章が該当する。チェーン術とは「集団を円陣形、つまり、丸い輪の形にしてイスや床に座ってもらう方法（p22）」であり、ペア術とは「ふたりで行うアイスブレイクのレッスン（p45）」であり、「チェーン術とペア術は交互に使うことが多い（p25）」としている。また、グループワーク術は、「たいていの場合、チェーン術とペア術のあと（p25）」に使うとしている。なお、同書では、アイスブレイクの基本は「こころをほぐす和やかな雰囲気づくり（p8）」と「人と人を出会わせ、つなぐこと（p9）」としている。第3章、第4章、第5章からは、チェーンを導入にして、ペアを作り、そこから集団のチームワークを形成する流れが見て取れる。そこで、本稿では、「人間関係」および「隊形」による分類と判断した。

④『リラックスと集中を一瞬でつくるアイスブレイク ベスト50』青木将幸著　ほんの森出版

第1章から第7章が該当する。青木氏は、目的を持ってアイスブレイクを実施していると述べており、第2章から第7章がおよそそれぞれの目的に対応している。そのため本稿では「目的」による分類と判断した。なお、第1章については、「ほんの数分で全員が体を動かし、大きな声を発することができるもの、と言ったらじゃんけんです(p14)」と緊張をとくために最適なのがじゃんけんであるとしている。

⑤『アイスブレイク＆リレーションゲーム』田中久夫・森部修著　マネジメントアドバイスセンター

第1章から第7章が該当する。同書では、アイスブレイクを紹介する際にメンバーの配置図を設けている。この配置図に注目してみると、第1章は一人が全体に自己紹介するもの、第3章と第4章は二人一組になるもの、第5章は三人一組のもの、第2章、第6章は1グループ5～6人程度のもの、第7章は全体で円や列になるなど動きのあるものという構成になっている。そこで、本稿では、「隊形」による分類と判断した。

⑥『アイスブレイク』今村光章著　晶文社

第4章から第6章が該当する。同書では、目的に焦点を絞り、今村（2009）を再構成し、チェーン術を「こころをほぐす」に、ペア術を「からだをほぐす」に、グループワーク術を「チームをつくる」に対応させている。そこで、本稿では、「目的」による分類と判断した。なお、同書では、これら三つのアイスブレイクについて、「ただし、この順で実践できるわけではない。実際のアイスブレイクの時には、さまざまな組み合わせを用いる（p25)」と述べている。

⑦『エンカウンターで学級が変わる：ショートエクササイズ集』國分康孝（監）　図書文化

第2章から第5章が該当する。同書は、「集団の成長をねらいとしてエクササイズを配置した（第2章以降)。この順序が集団形成の流れであり、エクササイズを計画するときの目安となる(p12)」と述べている。各章のねらいは、第2章が「教師（リーダー）と子どもたち（メンバー）の心をつなげる」、第3章が「子ども同士で安心できる2人組をつくる」、第4章が「4人組から8人組、学級全体へと、人間関係のつながりを大きくしていく」、第5章が「自分を見つめ自分を探求する」である。そこで、本稿では、「人間関係」「隊形」および「目的」による分類と判断した。

⑧『エンカウンターで学級が変わる：ショートエクササイズ集 Part2』國分康孝（監）　図書文化

第2章から第5章で紹介されている。同書では、國分ら（1999）の「なかよく」の部分を「大切に」改訂し、「先生となかよく」を削除している。その理由として「ただ単に、なかよくするだけでなく、仲間と自分を大切にすることがエンカウンターのめざすところだという想いが込められている（p55)」、「エクササイズを展開する過程で教師の自己開示が可能で、生徒とのリレーションを高め、互いに尊重し合う関係がつくれると考えたからである(p55)」と述べている。第3章、第4章、第5章の違いについては、各章に設けられている「ふりかえり用紙」の設問をみるとイメージしやすい。第3章「あなたを大切に」は、相手の人と協力してできたか、相手の人について何か新しい発見があったかなどを、第4章「みんなを大切に」は、グループの人たちと協力してできたか、グループの人たちについて何か新しい発見があったかなどを、第5章「わたしを大切に」では、自分自身を素直に見つめられたか、自分自身について何か新しい発見があったかなどを尋ねている。本稿では、國分ら（1999）と同様に「人間関係」「隊形」および「目的」による分類と判断した。

⑨『チームビルディング』堀公俊ら著　日本経済新聞出版社

メンバー同士がお互いのことを知り合い、打ち解け合うために使われるものを「アイスブレ

イク」、集まったメンバー同士で枠組みを共有し、関係を築いて協働意欲を高め、コミュニケーションしやすい環境を整えていく一連のプロセスのことを「チームビルディング」と呼び、第1章でアイスブレイク、第2章でチームビルディングとして分けて構成している。第1章は、「おしゃべりのきっかけをつくり、気軽な自己紹介や情報交換をする（p74）」もの、「短時間に打ち解けてすぐに本題に入りたいときに使える（p78）」もの、「比較的手ごろで準備が少なく、グループの人数にも柔軟に対応できる（p84）」もの、「大人数でありながらも、身体を動かしながらお互いのコミュニケーションを図り、一体感を醸成するための（p90）」ものに分類し、第2章は、ある程度お互いを知り合った人同士が、共同作業を通じてチーム活動のポイントを学ぶものをまとめている。そこで、本稿では、「目的」による分類と判断した。

表1　アイスブレイクの大分類

ジャンル	著者	章立て	各章の内容等	大分類		
				人間関係	隊形	目的
アイスブレイク	石田（2001）	※PART2からPART7まで分類 ※各章のタイトルなし	・初めのほうに書いてあるものは最初の頃に、後ろの方に書いてあるものは終わりの方に使うのが一般的	○		
	三浦（2002）	1 リーダーや集団に対しての安心感をつくる 2 相手の顔や名前を一致させる 3 集団内で自然にふれあえる状況をつくる 4 集団をダイナミックに交流させる 5 グループ意識をつくり育てる	・1～3で個々の交流姿勢が確立してから4、5はその機能を発揮する	○		○
	今村（2009）	3 出会いを導入するチェーン術 4 ふたりの出会いを演出するペア術 5 集団での出会いを促進するグループワーク術	・3と4は交互に使うことが多く、たいてい5は3と4の後に使う	○	○	
	青木（2013）	1 じゃんけんはアイスブレイクの王道 2 自己紹介をアイスブレイクのチャンスに 3 グループ分けで自然にアイスブレイク 4 眠気を覚まし、集中力を高め、リフレッシュ 5 チームワークを高めるアイスブレイク 6 相互理解を深めるアイスブレイク 7 授業や作業に“視点”を提供するアイスブレイク	・1は数分で全員が体を動かし、大きな声を発することができ、誰もが知っているためやり方の説明が最小限ですむもの ・2～7はアイスブレイクの目的に対応			○
	田中・森部（2014）	1 自分をアピールし印象づけるアイスブレイク 2 クイズで考えさせるアイスブレイク 3 ペアで持ち味を引き出すアイスブレイク 4 インタビューによるアイスブレイク 5 トリオで話し合うアイスブレイク 6 グループで考えるアイスブレイク 7 動きのあるアイスブレイク	・1は一人が全体に自己紹介するもの ・3と4は二人一組、5は三人一組のもの ・2、6は1グループ5～6人程度のものなど ・7は円や列になるなど動きのあるもの		○	
	今村（2014）	4 こころをほぐすアイスブレイク術 5 からだをほぐすアイスブレイク術 6 チームビルディングのためのアイスブレイク術	・目的に焦点を絞り、今村（2009）を再構成 ・4はチェーン術、5はペア術、6はグループワーク術に該当 ・ただし、この順でできるわけではない			○
エクササイズ	國分ら（1999）	2 先生となかよく 3 あなたとなかよく 4 みんなとなかよく 5 わたしとなかよく	・2は教師と子供たちの心をつなげる ・3は子ども同士で安心できる二人組をつくる ・4は四人組から八人組のように人間関係のつながりを大きくしていく ・5は自分を見つめ自分を探求する	○	○	○
	國分ら（2001）	2 シンプルエクササイズ集 3 あなたを大切に 4 みんなを大切に 5 わたしを大切に	・2は集団の実態にそれほど左右されない単純明快なもの ・國分ら（1999）の「なかよく」の部分を「大切に」改訂し、「先生となかよく」を削除	○	○	○
チーム・ビルディング	堀・加藤・加留部（2007）	1 アイスブレイクを活用する 1-1定例のミーティングで使える技法 1-2短時間のワークショップで使える技法 1-3グループ分けに使える技法 1-4大人数のワークショップで使える技法 2 チーム・ビルディング・エクササイズを活用する 2-1研修や合宿で使える技法 2-2ビジョンや目標を共有するための技法 2-3本格的なチームづくりのための技法	・1-1はおしゃべりのきっかけをつくり、気軽な自己紹介や情報交換をするもの ・1-2は短時間に打ち解けてすぐに本題に入りたいときに使えるもの ・1-3は手ごろであり、グループの人数に依存せずに柔軟に対応できるもの ・1-4は身体を動かしながら一体感を醸成するためのもの ・2以降はある程度お互いを知り合った人同士が、共同作業を通じてチーム活動のポイントを学ぶもの			○

5　小分類の結果

小分類のカテゴリーについては、まず各書籍が用いている見出しを抽出し、カテゴリーをリストアップした。その後に見出しはなくても内容的にそのカテゴリー含まれているか否かを判断し、それぞれ◎および○を表中に加えた。大分類の再掲も含めて表2に示す。小分類のカテゴリーは「準備物」「所要時間」「隊形」「人数」「目的」「場所」「理論・技法」「対象」「どんなときに」「難易度」であった。大分類と重複するカテゴリーとして「隊形」および「目的」があることがわかる。

(1) 準備物、所要時間、隊形、人数

「準備物」「所要時間」「隊形」は、ほぼすべての書籍で用いられていた。「人数」については、石田（2001)、國分ら（1999）および國分ら（2001）には具体的な記述は見られなかった。國分ら（1999）および國分ら（2001）は学校における学級を対象にしているため、およそクラスサイズで実施するという前提があったものと思われる。「準備物」「所要時間」「隊形」「人数」はアイスブレイクを選定する際の基本的な要因といえるであろう。

(2) 目的

「目的」は、青木（2013)、國分ら（1999）および國分ら（2001）においては大分類にも、小分類にもカテゴリーがみられた。たとえば、青木（2013）には、第6章「相互理解を深めるアイスブレイク」に掲載されている「エナジーチェック」というアイスブレイクがある。これは、どのくらい元気であるかを手の高さ（まっすぐ上にあげた状態を100点、水平に上げた状態を50点、真下に下げた状態を0点）で示すものである。このアイスブレイクの目的には「相互理解・緊張を和らげる」とある。また､國分ら（1999）においては、第4章の「みんなとなかよく」は大分類の「目的」を示しており、そこで紹介されている複数のエクササイズは「リレーションづくり」「相互理解」「受容体験」「ソーシャルスキル」という小分類としての「目的」に分類されている。これらより、アイスブレイクは複数の目的が重複するものもあれば、いわゆる「目的とねらい」のように、構造的

表2　アイスブレイクの小分類

著者	小分類										大分類（再掲）		
	準備物	所要時間	隊形	人数	目的	場所	理論・技法	対象	どんなときに	難易度	人間関係	隊形	目的
石田（2001）	◎	◎	◎								○		
三浦（2002）	◎	◎	◎	◎							○		○
今村（2009）	○	◎	○	◎	○						○	○	
青木（2013）	◎	◎	○	◎	◎	◎							○
田中・森部（2014）	◎	◎	○	◎								○	
今村（2014）	○		○	◎	○								○
國分ら（1999）	◎	◎	○		◎	◎	◎	◎	◎		○	○	○
國分ら（2001）	◎	◎	○		◎	◎	◎	◎	◎		○	○	○
堀・加藤・加留部（2007）	◎	◎	○	◎						◎			○

注）◎は見出しが設けられているもの、○内容的に含まれていると判断できるもの

になっているものもあることがわかる。ただ、後者は数が少ないようである。

(3) 場所

「場所」は青木（2013)、國分ら（1999）および國分ら（2001）において、教室だけでなく、体育館、オープンスペース、屋外などと分類されている。

(4) 理論・技法、対象、どんなときに

「理論・技法」「対象」「どんなときに」は國分ら（1999）および國分ら（2001）においてのみ見られた。「理論・技法」については、構成的エンカウンターグループを理論的背景としており、たとえば、國分ら（2001）の第2章「シンプルエクササイズ集」でエンカウンターのねらいを支える核となる理論や技法（グループづくり、反復質問法、選択法、リフレーミング、非言語、連想法、役割交換法、自己分析、自己表現、自己主張、シェアリング）が紹介されている。「対象」については、小学校（低学年、中学年、高学年)、中学校、高校、大人の選択肢が設けられており、該当する対象がそれぞれ記載されている。「どんなときに」については、朝の会、学活、行事の後、保護者会など、エクササイズを実際に用いる具体的な場面が提案されている。

(5) 難易度

「難易度」については、堀･加藤･加留部（2007）においてのみ見られ、3段階で評定している。大分類で見てきたように、やさしいアイスブレイクについては､章を独立して設けているものもある。青木（2013）における第1章「じゃんけんはアイスブレイクの王道」や國分ら（2001）における第2章「シンプルエクササイズ集」が該当する。アイスブレイクを選定する際に、やさしいものから始めたいというニーズはあると思われる。

6 まとめ

本稿では、ワークショップにおけるアイスブレイクついて大分類と小分類を試みた。大分類は「人間関係」「隊形」「目的」という3個のカテゴリーが、小分類は「準備物」「所要時間」「隊形」「人数」「目的」「場所」「理論･技法」「対象」「どんなときに」「難易度」という10個のカテゴリーが抽出された。「隊形」「目的」については大分類と小分類が重複したが、「人間関係」については大分類にのみ見られた。アイスブレイクの一例を示すような微視的視点では、参加者間の人間関係の程度によってアイスブレイクを使い分けることがあることをイメージしづらいのかもしれない。

アイスブレイクの全体像を把握するためには、巨視的視点が必要になる。冒頭で述べたように、今村（2009）は「アイスブレイクは集団の「固さ」を突き崩すダイナマイトの役割と、人と人をくっつけるセメントのような役割を果たすものなのです（p9)」という例えを用いた。また、堀・加藤・加留部（2007）はアイスブレイクからチームビルディングへの流れを示し、國分ら（2001）は、長い時間のエクササイズを実施する際には、グループとしての一体感を得て、グループの構成員の相互の肯定的依存関係をつくり、自己主張できるようにするという流れを意識することを推奨している。これらに注目すると、「アイスブレイクはどのような『目的』があるのか？」という点や、「アイスブレイクを導入することにより『人間関係』はどのように変わっていくのか？」という点が注目されているのかもしれない。しかし、アイスブレイクを理解するためには、複数のアプローチが必要であろう。「アイスブレイクはどのような『隊形』で実施されているのか？」という点を伝えることも有効になるかもしれない。

また、効果的なアイスブレイクの選定が目的となる場合は、本稿で示した小分類がひとつの指標となるであろう。「準備物」「所要時間」「隊形」「人数」を基本的な要因として参考にしながら、対象者の属性やワークショップ全体の目的との相性も

考えて選定するのが望ましいと思われる。もちろん、「難易度」は実施者の力量に沿ったものが望ましい。堀・加藤・加留部（2007）は、自分が扱うアイスブレイクの種類をいたずらに増やすのではなく、少なくてもよいから自分が得意なものの完成度を上げていくことが望ましいと述べている。本稿が、これから磨きをかけていくアイスブレイクを探すための手助けになれば幸いである。

引用文献

青木将幸（2013）『リラックスと集中を一瞬でつくるアイスブレイク ベスト50』ほんの森出版

安斎勇樹（2013）「ワークショップを企画する」山内祐平・森玲奈・安斎勇樹『ワークショップデザイン論：創ることで学ぶ』慶應義塾大学出版会，pp.41-99.

石田易司（2001）『アイスブレーク』エルピス社.

今村光章（2009）『アイスブレイク入門』解放出版社.

今村光章（2014）『アイスブレイク：出会いの仕掛け人になる』晶文社.

國分康孝・片野智治（2001）『構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方：リーダーのためのガイド』誠信書房.

國分康孝（監修）／國分久子・林伸一・飯野哲朗・簗瀬のり子・八巻寛治（編）（1999）『エンカウンターで学級が変わる：ショートエクササイズ集』図書文化.

國分康孝（監修）／國分久子・林伸一・飯野哲朗・簗瀬のり子・八巻寛治（編）（2001）『エンカウンターで学級が変わる：ショートエクササイズ集 Part2』図書文化.

薗田碩哉（1994）「ワークショップとは」『社会教育』49号（10），pp.5.

田中久夫・森部修（2014）『アイスブレイク＆リレーションゲーム：出会いから親しくなるまでを演出！』マネジメントアドバイスセンター.

中野民夫（2001）『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波書店.

堀公俊・加藤彰・加留部貴行（2007）『チームビルディング：人と人を「つなぐ」技法』日本経済新聞出版社.

三浦一朗（2002）『楽しいアイスブレーキングゲーム集：より円滑なコミュニケーションを生むための素材と手法』日本レクリエーション協会.

Attempt to classify icebreaking in workshop

TAZAWA Minoru

The purpose of this study was to classify icebreaking in workshops. The data were nine books introducing icebreaking. Based on book chapters, we undertook a major classification and made minor classifications based on the heading of the page introducing each icebreaking. The main results were as follows: (1) three major categories and ten small categories were identified. (2) In order to understand the whole picture of icebreaking, it might be effective to show classification through the "formation" as well as through "human relationships" and "purposes." (3) "Preparation", "required time", "formation", are "number of people" are criterion for selecting an effective icebreaking.